



克典

ゲツカビジン

彼は努めてさりげなく彼女を誘った。気取られないように。少なくとも彼を疑っていない彼女は快諾した。

最上階とその一階下が吹き抜けになったそのスカイバーにはグラランドピアノが置かれている。ピアニストは枯淡の境地にあるらしく、慎みのある演奏で、煩くなかった。心地良い微風のような旋律が吹き抜けの裡で循環している。

大劇場の銀幕ほどもあるガラススクリーンの麓に彼らはいた。

「近頃、伴侶とか添い遂げるとかっていうことがよく判らなくなってきたよ。周りで色々あってさ」

「色々？」

「女友達にさ、さらりと二股掛けてること打

ち明けられた……いや、事も無げに話したのか。そしたらさ、じぶんでもよく判らないんだけど、落ち込んだじゃってさ」

「気になってたんでしよう？」

「それが違うんだ。ヒトとして好きなのは事実だけさ。なんか、このところ、周りを客観的に眺めていたらさ、俺が間違っていたような気がしてきてさ。切り結ぶつてもっと重いものだとおもってたんだけどさ……」

「重いものだよ。間違っていない」

虚を衝かれたように彼は彼女の貌を注視した。潔癖で偽りは見当たらなかった。

「人と人との関係を軽く考える潮流は在るけれど、私は、それは違うとおもう。結局、そう考えるヤツには、軽薄なヤツしか寄ってこないってことじゃない？」

鋭利に彫琢された鉱石のような意志をみた。

彼は自らの感情が蜃気楼に類するもので

はないことを確信した。

彼は、シナリオを実行に移した。

彼女にとっては思い掛けないことで、彼女は愕き、戸惑い、黙考を迫られた。彼と彼女のあいだに沈黙が垂れ籠めた。

一頻りして、彼女のソプラノが沈黙を優しく融かした。

「あなたが巫山戯てなんかいないって判るし、認めてくれて嬉しいよ。でも……」

「だめか？」

「ううん……そうじゃない。買い被ってるよ。私は鏡だもの。誰に視られているかで姿を変える情けない生き物だもの」

「それは誰だつてそうだよ」

「あなたのような人と向き合うよりも、私はきつといい加減な人と一緒にいる方がラクなんだよ……うんきつとそうだよ」

そう彼女は自らに云い聴かせる。

「私、いまのじぶん、好きじゃないんだも

ん」

「俺はいまのお前に惚れたんだ」

遂に彼女の感情が頬を伝った。彼は愕きの色を隠せなかった。

「私は、私になりたい。誰の力も借りないで……」

彼は悟った。打つ手の不在を。暫し、動揺の鎮圧に専念した。そして、カクテルグラスに手を伸ばした。一口吞んで、例の大劇場の銀幕を見遣った。

眼下に、東京星屑。

彼は巨きな窓に映る己の像を認めた。そして、のろのろと視点だけを横に這わせた。

泣き濡れた彼女の華奢な肩や泪の粒と

燦々と煌めく天地分け隔て無く散らばった星屑がオーバークラップした。

ピアノストは、演奏を終え、老兵のように無言で立ち去った。

This novel was written in 2007-07-03.

photography:

はむ <http://www.ashinari.com/2009/06/11-022091.php>



克典

ゲツカビジン